



『煌夜祭』特別書き下ろし短篇

「ありきたりな幸福を」

多崎 礼



あれは今から十二年前、霧の濃い初秋の夜のことだった。

誰かが家の戸を叩いた。「すみません」と言う声に、ムジカは首を傾けた。
こんな夜更けにいったい誰だ？

扉を開くと、そこにはまだ年若い男が立っていた。艶のない黒髪、浅黒い肌、吊り上がった細い目、腰に大きな革袋を下げている。

「夜分遅くにすみません」

男は丁寧な顔を垂れた。一見旅商人のようだが、ムジカはすぐに気づいた。この男、足下に影が落ちない。人の姿をしているが人ではない。しかし魔物とも様子が違う。

こいつ、何者だ？

探るようなムジカの視線に気づいているのかいないのか、男は飄々とした声で続けた。

「貴方が持っている闇輝晶、私に譲って貰えませんか？」

「あん、きしょう？」

「頭の尖った卵のような形をした黒い宝玉のことです」

「ああ、あれか」

先月「薬湯のお礼に」と黒光りする宝玉を貰った。鉄顎で海底を掘った際、泥の中から出てきたのだという。「こんな高価なもの貰えない」と断ったのだが、「いつも世話になってるから」と半ば強引に押しつけられた。後から聞いた話によれば、その宝玉を枕元に

置いて寝ると恐ろしい夢を見るらしい。薄気味悪いので、捨ててしまおうかと思っていた。
そうだ。

ムジカは戸棚の中から黒い宝玉を取り出した。体よく押しつけられた代物だ。このままくれてやつてもよかった。が、どうにも悪い癖が出た。人でなく魔物でもないこの男、いったい何者なのだろう。この宝玉にはどんな物語があるのだろう。

知りたくなかった。俄然、興味が湧いてきた。

「譲ってやつてもいいが、代わりに聞かせてくれないか。お前は何者だ？　なんでこの宝玉が欲しいんだ？」

男はしばし逡巡し、それからおもむろに口を開いた。

「ならば代償に『夢利き』をご披露いたしましょう」

彼は革袋をまさぐった。袋に入れられた色とりどりの宝玉、その中から琥珀色の玉を選び出す。それは卵というよりも花の蕾のようだった。表面にはうっすらと鱗状の文様が見てとれる。

『彩輝晶』は叶うことのない夢の結晶。これにかりそめの時空を与え、失われた夢を再現する。それが夢利きです。この彩輝晶はしきりに帰りがたっておりましたゆえ、ここで夢利きをいたしましょう。結晶化したこの夢を解き放つことにいたしましょう」
ムジカは引き込まれるように宝玉を見つめた。それは不思議な明滅を繰り返している。

自ら光を放つ宝玉など、これまで見たことも聞いたこともない。こいつはおもしろい話が聞けそうだ。

「いいだろう」ムジカは鷹揚に頷いた。「見せてくれ。その夢利きとやらを」

「承知しました」

男は眼前に宝玉を掲げた。それにふうつと息を吹きかける。宝玉がぶるりと身じろぎした。かと思うと、透明な花弁がほろりとほどける。謎の男の掌の上、琥珀色の花が咲く。

ふと声が聞こえた。

懐かしい、とても懐かしい声が聞こえる――

★ ★ ★ ★ ★

今でも覚えている。

姫が広間に現れた瞬間、他のものは一切目に入らなくなった。彼女の瞳、彼女の髪、周囲の空気さえもまばゆく輝いて見えた。この世のものとは思えなかった。まさに天使だと思った。俺は一瞬で恋に落ちた。劇的で衝撃的な一目惚れだった。

円舞の相手を申し込もうと姫に群がる男達、それをかき分けかき分け、俺は彼女の前に立った。涼やかな瞳が俺を見上げている。それ目の当たりにした途端、頭の中が真っ白になった。

「俺と結婚して下さい！」

気づいた時には叫んでいた。

周囲の男達が目を剥いた。誰かがグラスを取り落とした。啞然と杲然。軽蔑と失笑。よ

そよそしい空咳。気まずい沈黙。

しまった。やらかした。

頭から血の気が引いた。どどつと冷や汗が吹き出してきた。

可憐な姫が俺を見上げた。眉根を寄せ、申し訳なさそうにささやいた。

「……ごめんなさい」

こうして俺の初恋は終わった。

失恋は骨身に堪えた。数日間は何もする気が起きなかった。勉強にも鍛錬にも身が入らず、俺は自室にこもって煩悶した。

ああ、わかっているさ。不相応もいいところだ。彼女は島主の一人娘、俺はしがない小領主の次男坊。身分の差がありすぎる。断られて当然だ。

だが失恋の痛手を癒やす間もなく、さらなる厄災が俺を襲った。年の離れた三人の姉が俺の部屋へと押しかけてきたのだ。

「貴方、お姫様に求婚したんですって？」

「女つ気の欠片もないでくの坊が、いったいどういう風の吹き回しよ？」

「でも貴方、お姫様の名前さえ知らなかったのよね？」

「顔しか知らないのに求婚した？ それってものすごい侮辱的なことよ？」

「彼女のことを理解しようともせず、自分の気持ちを押しつけるなんて最低ね」

「家柄目当てだっと思って思われても仕方がないわ」

「そんな男、ふられて当然」

「むしろお姫様がかawaiiそう」

「前々から馬鹿だとは思っていたけれど」

「まさかこんなにも大馬鹿だとは思わなかったわ」

罵詈雑言が後から後から降ってくる。

俺は泣きそうになった。こいつらには優しさというものが無いのか。傷心の弟を慰める気はないのか。たった一人の弟が可愛くはないのか。

そうは思えど、認めざるを得ない。姉の言うことは正しい。

俺は姫のことを何も知らない。好きな色、好きな食べ物、好きな季節も知らない。姫も俺のことを知らない。知らない相手からいきなり求婚されたら、誰だってドン引きする。

そもそも一度断られたくらいで諦めるなんて俺らしくない。誤解されたままでは終われ

ない。

俺は彼女のことを調べ始めた。幸いなことに、両親が島主様のお屋敷で料理人をしていてという学友がいた。姫について尋ねると、彼は快く答えてくれた。

「お嬢様は勉学に優れ、歌と書物を愛する心優しい御方だ。でも彼女には歌や本よりもっと好きなものがある。それが料理だ。『厨房に立ち入るのは感心しません』と執事が渋い顔にしても、こっそりとやって来て、俺の両親に『昨夜のスープの作り方を教えて下さい』ってせがむんだそうだ」

それとは別の学友、両親がホテルで雑貨屋を営んでいる者にも話を聞いた。

「店の手伝いをしていて、きまって彼女の姿を見かけるよ。実は店の少し先に孤児や病人のための救済院があつてね。姫様は連日そこに通ってるんだ。言っとくけど、施しを行うためじゃないぜ？ 彼女は困っている人達を助けたいって、自ら進んで救済院で働いてるんだ」

俺は面喰らった。にわかには信じられなかった。だって彼女は島主の娘だ。何の不自由もない暮らしが保障されている。汗水垂らして働く必要なんてないはずだ。

真相を確かめるため、俺はホテルに向かった。姫が働いているという救済院を訪ねた。はたして彼女はそこにいた。病人達の介護をし、孤児達に読み書きを教えていた。孤独な

老人の世話をし、親のない幼子に子守歌を歌っていた。それだけでも驚嘆すべきことなのだが、何より俺を驚かせたのは、慈愛に満ちた彼女の微笑みだった。赤子の襁褓を替える時も、汚れ物を洗濯する時も、彼女は嫌な顔ひとつしなかった。誰一人として例外なく、すべての者達に惜しみない愛情を注いでいた。

この人は聖女だ。

俺は感動に打ち震えた。今すぐ駆け寄って求婚したい。そう思ったが我慢した。それでは前回の二の舞だ。俺が知りたいのは姫の内面、姫の真心。それを理解するためには、彼女と同じ目線に立つ必要がある。となれば手段は唯一つ。この救済院で働いてみるしかない。

俺は身分を隠し、救済院に通った。そこで俺が働いているのを見て、姫は嫌そうな顔をした。声にこそ出さなかったが、迷惑だと思ったに違いなかった。その証拠に彼女は俺を無視した。万人に愛情を注ぐ姫が、俺にだけは見向きもしなかった。

しかし半年もすると、少しずつ変化が表れた。といっても変わったのは姫ではない。俺だ。姫を理解するために始めたはずの仕事が、なんだかとても、楽しくなってきた。俺ののだ。

「兄ちゃん、力持ちだねえ」

「まだ若いのに働きモンだ。偉いねえ」

「こっちの荷物も頼めるかい？」

「おう、任せてくれ！」

俺には三人の姉がいて、その上には長兄がいて、家督は兄が継ぐことになっていた。次男だからといって邪険にされたことはなかったが、心の奥底ではいつも孤独を感じていた。俺には居場所がない。俺は必要のない人間なのだ。そんな思いが拭えなかった。

だから人から頼られるのは嬉しかった。人を助ける仕事に生き甲斐を感じた。子供達も俺を慕ってくれた。毎日がとても楽しかった。これまでにないくらい、充実した日々だった。

俺を見る姫の眼差しが次第に和らいでいき、ついには労いの声をかけてくれるようになった。次第に会話が増えていき、他愛のない話をして笑ってくれるようになった。彼女の好きな色は小麦色、好きな食べ物はダイダイ豆の煮物、好きな季節は実りの秋。夢は学校を建てること、そこで子供達に読み書きを教えることだと知った。

「あと、これは誰にも言ったことがないのだけれど——」

仕事の合間の休憩時間。粗末な椅子に腰掛けて、彼女は恥ずかしそうに俯いた。

「私は普通の暮らしがしたいの。自分で身の回りのことをして、料理を作って、愛する人と寄り添って、助け合って生きていく。そんなありきたりな幸福に憧れるの」

その声がとても寂しげだったので、俺は胸が苦しくなった。

「君の思い通りにすればいい。君が望めば叶わないことなんて何もない」

「いいえ、無理よ」

「無理なものか。もし家名が君を縛るといふのなら、俺と一緒にこの島を出よう」

姫は驚いて俺を見た。俺はその目を見返した。

「君となら俺はどこへでも行ける。どんなことでもする」

ここが正念場だと覚悟を決めた。腹の底に力を込め、彼女の手を握った。

「俺と結婚してくれ」

姫は微笑んだ。懲りない人ねというように。

その頬を一筋の涙が滑り落ちていくのを見て、俺は急に不安に駆られた。

「ア……」

彼女の名前を呼びかけた時、後ろから、わあっと歓声が上がった。振り返れば見慣れた顔が並んでいる。救済院の子供達だ。

「見つめあつてる！」

「お手々にぎつてる！」

「お姉ちゃん、お兄ちゃんとききあつてるの？」

「いつかつこんするの？」

「しないわ」きっぱりと姫は断言した。「この人とは結婚しない」

俺は目を剥いた。情けないことに、思わず聞き返してしまった。

「なぜだ？ そんなに俺のことが嫌いか？」

「いいえ、貴方はとてもいい人。だからこそ巻き込みたくないの」

声を震わせ、姫は目を伏せた。

「私の血筋は、呪われているから」

二度の失恋に俺は打ちのめされた。自室にこもり、悶々と考え続けた。

俺が姫に惚れたのは外見や家柄に引かれたからではない。彼女の心の美しさに心惹かれたからなのだ。姫の立場は理解しているつもりだし、支えていくだけの覚悟もある。生半可な気持ちで求婚したわけではない。なのに「私の血筋は呪われている」とはどういうことだ？ 鳥主の血統が呪われているとは思えない。姫の言葉を疑いたくはないけれど、あれは求婚を断るための方便だ。そうとしか思えない。

心が通じ合ったと思っていただけに衝撃は大きかった。ぐるぐると思い悩む俺の元に、またもや災禍が訪れた。どこで話を聞いたのか、三人の姉は俺の部屋に踏み込むなり、口々に俺を罵った。

「ああ鬱陶しい。いじけるのも大概になさい」

「嘆いていても事態は変わらないわよ」

「貴方、嫌われたわけじゃないのよ。なのに諦めるの?」

「その程度の覚悟でお姫様に求婚したの?」

「浅薄ね」

「この臆病者」

「馬鹿すぎるわ。我が弟ながら馬鹿すぎるわ」

相変わらずひどい物言いだった。しかし、正論だった。

俺は三人の姉と向かい合った。

「わからないんだ。『私の血筋は呪われている』とは、いったいどういう意味なのか」

「あら嫌だ。貴方、知らないの?」

「魔物よ。冬至の夜に現れて人を喰うという化け物のことよ」

「魔物は元は人間で、しかも鳥主筋に当たる高貴な血の持ち主なんですって」

「貴方が愛するお姫様には弟君がいるでしょう? 病弱で滅多に姿を見せないけれど」

「彼女は弟が魔物なのではないかと恐れているのよ」

三人の姉はうんうんと頷き合った。

示し合わせたように目を細め、俺を睨んだ。

「貴方、姫様を愛しているのですよ」

「ならば彼女が背負った運命ごと支えてみせなさい」

「もつとも恥ずべきことは、するべき時にするべき努力をしないことです」

「我が家の家訓は『後悔しない人生を送れ』です」

「貴方も我らの弟ならば、その誇りを持って、後悔しない人生を歩みなさい」

認めたくはない。

認めたくはないのだが、姉の言葉は心に響いた。

姫は博愛の人だ。誰にでも平等に愛を与える。その姿は献身的であり、どこか犠牲的でもあった。魔物は災厄を呼ぶという。もしかして彼女は、罪滅ぼしをしているのではないだろうか。将来、弟が招くかもしれない厄災を、彼が犯すかもしれない大罪を、贖おうとしているのではないだろうか。

だとしたら、俺に出来ることは唯一つ。

知恵と知識と剛力で、その厄災を止めるのだ。

俺は鍛練を重ね、剣技を磨いた。歴史や外交などの本を取り寄せては、寝る間も惜しんでそれを学んだ。姫を救いたい。血の呪いから解き放つてやりたい。最初はその一心だった。しかし現在の政情を知るにつれ、少しずつ考え方が変わってきた。

今、十八諸島輪界は危機に瀕している。いっどこで戦争が起きても不思議ではない。

あの日、姫は言った。普通の暮らしがしたいのだと。ありきたりな幸福が欲しいのだと。

もしそれが彼女だけの幸せを意味するものであったなら、姫は俺の手を取ってくれていただろう。一緒にこの島を出て、どこか知らない場所で幸せに暮らすことも出来ただろう。だが姫が望む幸福は、もっと広くて大きなものだ。父も母も病弱な弟も、救済院の病人や孤児達も、この世に生きるすべての人が安寧の中で平和に暮らす。それが彼女が望む『ありきたりな幸福』だ。

ならば俺はそれを守る男になろう。彼女の大きな夢を支え、生涯をともに歩めるようにな、器の大きな男になろう。

そう心に誓ってから、三年が過ぎ、五年が過ぎた。

父は小領主を引退し、兄に家督を譲った。三人の姉も相次いで縁談がまとまり、良家へと嫁いでいった。

そして俺は努力と実力が認められ、大隊の指揮をまかされるようになった。いくつかの灌漑計画を成功させたことにより、相談役にも抜擢された。

挨拶に訪れた島主のお屋敷。かつて姫に一目惚れした広間で、俺は島主スーイ様と面会した。

「お前の活躍、嬉しく思うぞ。これからもこの島のために働いてくれ」

「ありがたきお言葉。身命を賭して励むと誓います」

「ところでお前、今年でいくつになった？」

「二十五です」

「結婚は？」

「まだです」

「心に決めた相手はいるか？」

「はい」

俺はスーイ様の目を見て答えた。

「私が真心を捧げるのは唯一人、ご島主のご息女アイダ様です。初めてお会いした時から今日まで、ずっとお慕い申し上げております」

スーイ様は小さく息を吐いた。俺から目を逸らし、窓の外へと視線を向けた。

「アイダは不憫な娘なのだ。あれにはずっと辛い思いをさせてきた。ならばこそ、結婚相手には娘が望む相手を選ぼうと思った。聞けばあれにも意中の相手がいるという。その若者の名はエナド・ウム・トウラン。つまり、お前だ」

予想はしていた。期待もしていた。しかし実際にそれを耳にして、心臓が口から飛び出しそうになった。落ち着くと、俺は自分に言い聞かせた。落ち着け、落ち着け、まだ結婚を許して下さったわけじゃない。そう簡単にいくはずがない。舞い上がるには早すぎる。

「しかし、お前も聞いているだろう？」

案の定、スーイ様は表情を暗くした。

「アイダを娶るということは呪われた運命を背負うということ。子を成すことは許されな
い上に、もし血筋から魔物が現れたなら、私達の手でそれを成敗しなければならぬ」
刃物のような眼差しで、スーイ様は問いかける。

「お前にその覚悟はあるか？ そのような事態になっても後悔しないと誓えるか？」
「誓います」

俺は即答した。深呼吸をしてから、さらに続けた。

「私はアイダ様を愛しています。彼女が背負った運命、彼女が抱いた大きな夢、そのすべ
てを愛しています。彼女を支え、ともに人生を歩むためならば、俺はどんな犠牲も厭いま
せん。たとえこの先、何があるかと、決して後悔はいたしません」

「——聞いたか、アイダ」

スーイ様が背後を振り返った。それでようやく俺は気づいた。柱の陰に誰がいる。一步、
二歩、前に出てくる。暗がりから現れたその人は俺の前に立ち、濡れた瞳を見つめた。
「エナド様。もう一度、私にあの言葉を言ってくれますか？」

「貴方が望むなら何度でも」

俺はその場に片膝をついた。彼女の右手を取り、彼女を見上げた。

「アイダ・マーマヤ・ターレン様。どうかこの私、エナド・ウム・トウランと結婚して下さい

い」

アイダは天使のように微笑んだ。

「ええ、喜んで」

その瞬間、歓喜が頂点に達した。

俺は立ち上がり、彼女を抱きしめ、幼子のようにおんおん泣いた。



さらさらと水晶の花が散っていく。透明な花弁が掌からこぼれ落ち、輝きながら溶けて
いく。あとには何も残らない。煙も欠片も残らない。

「それでは、これはただいて参ります」

謎の男は闇輝晶を手にとった。それを布に包んで懐にしまうと、もう用はないというよ
うに背中を向けて出ていった。

ムジカは動けなかった。

やがて深い霧が薄れ、東の空が明るくなり、真っ白な朝日が差し込んできても——
それでもムジカは動けなかった。

彩輝晶は叶わなかった夢の結晶。あの夜、ムジカが見た夢はとても幸福な……しかし叶うことのない夢だった。と言っても、彼らが不幸だったとは思わない。エナドもアイダも後悔しない人生を歩んだ。それだけは確かだ。

多くの人が夢を描く。そのほとんどが叶うことなく散っていく。それでも夢や理想を抱くことは決して無駄なことではない。この話を聞いた語り部達は、誰かにこれを語るだろう。それに感銘を受けた誰かが、また別の誰かに話すだろう。そうやって人の意志は、人から人へと伝わっていく。人の思いが人を変え、その人がまた別の人間を変え、きつと世界をも変えていく。

アイダが夢見たありきたりな幸福を、誰もが当たり前に甘受する。そんな時代がきつと来る。エナドとアイダには、その時代にもう一度生まれてきて欲しい。心からそう思う。

ああ、それと、あの謎の男。

人でも魔物でもなくせに、彼は黒い宝玉をとても大事に扱った。他の宝玉は雑に革袋に入れていたのに、あの黒い宝玉だけは布に包んで懷中にしまった。あれは彼にとつて、とても大切な夢の結晶だったのだろう。

それほどまでに慕われる夢とは、いったいどんなものだったのだろう。誰が思い描いたものだったのだろう。叶うことなく散った夢、それをあの男は誰に見せるつもりなのだろう。

まあ、どんなに考えたところで、それを知る術はないんだが――

あの闇輝晶の夢を利くことになるその人のことを、俺は少しだけ、羨ましく思うよ。

